

平成22年 6 月 23 日現在

研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18592344  
 研究課題名(和文) 家族形成過程における家族機能に影響する要因の概念モデル構築  
 研究課題名(英文) Family function, sleep-wake and social rhythm, and quality of life of Japanese couple in early family formation stage  
 研究代表者  
 山崎 あけみ (YAMAZAKI AKEMI)  
 東京大学・大学院医学系研究科・講師  
 研究者番号：90273507

研究成果の概要(和文)：家族形成期の78組の日本人夫婦に対して、妊娠期・産後1ヶ月・産後6ヶ月に、属性・McMaster Family Assessment Davis (FAD)・Quality Marriage Index (QMI), SF-8, Sleep, wake, and social rhythm (VAS)などの自記式質問紙調査を実施した。産後2ヶ月が、家族機能は最も低いが、男女・初経ともに6ヵ月後には、子どもを迎える前よりも良好な機能を示した。産後6ヶ月の家族機能に関連する要因は、男女・初経で異なる傾向もあるが、個人のQOLと夫婦関係を良好に保つことが一助となるという示唆を得た。

研究成果の概要(英文)：This longitudinal study investigated the association of the family functioning in early family formation stage in Japanese couple. A total of 78 couples aged 22 to 43 were completed McMaster Family Assessment Davis (FAD), Quality Marriage Index (QMI), SF-8, Sleep, wake, and social rhythm (VAS) in three different time points (3<sup>rd</sup> month of pregnancy, 1 month postpartum, 6 month postpartum). Through repeated measure ANOVA and Regression model analysis, the improvement of marital relationship for couples and health related QOL may be beneficial for establishing family function.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	799,993	240,000	1,039,993
年度			
年度			
総計	3,499,993	660,000	4,159,993

研究分野：医歯薬

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：家族機能・生活リズム・育児期

### 1. 研究開始当初の背景

わが国は、深刻な少子化の問題をかかえている。これまでのように、晩婚化・未婚化による出生率の低下だけではなく、婚姻関係にある夫婦も子どもを生まなくなった。子どもを生み育ててゆく時期は、生活リズム・家族

関係・家族生活の調整を通じて、家族機能を獲得してゆく過程であり、中でも妊娠期から産後6ヶ月にかけて、どの時期にどのような要因が家族機能に影響するのか明瞭にすることにより、周産期医療の現場で、妊産褥婦と家族への支援を考える手がかりとするこ

とができる。

母子領域の家族機能に関する欧米の看護研究は、Mercer<sup>1)</sup>らの縦断的調査の成果が代表的である。医療的にハイリスク・ローリスク群の男女に対して、産後8ヶ月での家族機能（Feetham 家族機能尺度・FFFS）に影響する因子として、4群（ハイリスク・ローリスクの男女）に共通するものは、抑うつ傾向であった。中でも、ローリスク女性群の家族機能は、日常生活におけるネガティブライフイベントに影響を受けていた。

国内では、中村ら<sup>2)</sup>の横断調査において、6歳以下の子どもを養育する健康な家族の家族機能（FAD 日本語版）には、家事・コミュニケーション・家族内ルールが影響されるという結果を得ている。

さらに家族の形成期には、新生児とともに、新しい生活一睡眠リズムに夫婦が順応してゆく時期である。Yamazaki ら<sup>3)</sup>は、初めての子どもを迎える日本人夫婦に妊娠末期と産後1ヶ月に、生活一睡眠リズムの調査を通じて、産褥早期の女性の睡眠リズムの獲得には、従来から指摘されている新生児の要因だけでなく、男性の日常生活リズムの規則性が関連していると示唆した。

## 2. 研究の目的

本研究は、先行研究の知見を参考としながら、新しい家族成員を迎える家族の家族機能の推移と影響する要因を縦断的デザイン（妊娠末期・産後2-3ヶ月・産後6ヶ月）で、探索することを目的とする。

## 3. 研究の方法

### 1) 研究の対象者

関西・関東地区の3施設において開催された出産準備教室で対象者のリクルートを行い、参加に同意した夫婦を研究対象とした。包括基準として、20歳以上で、現在通院・入院治療中の疾患のない健康な妊娠経過の日本人夫婦とした。除外基準として、単胎でないこと、胎児になんらかのリスクが診断されていることとした。

### 2) 調査期間・研究の手続き

2009年7-9月に主任研究者および共同研究者が、教室に出向き、開催前に、研究趣旨を説明して依頼した。産後2回（産後1ヶ月・6ヶ月）のデータ収集は、1回目に本人より聴取した自宅住所に郵送し、返信用封筒にて返信してもらった。

### 3) 倫理的配慮

所属する大学の研究倫理委員会、および、各施設の倫理委員会において承認を得た。夫婦の回答が、相互に漏れることのないように個別の封筒により依頼し返信してもらった。

夫婦の了承を得て、回答用紙に同じ数字のナンバリングを行うことにより、夫婦のデータを連結可能にして解析をした。

## 4) 調査項目と測定用具

**属性：**基本属性は、年齢・性別・暮らし向き・最終学歴・就業状況・仕事についてのストレスの有無について尋ねた。夫婦関係について、Norton（1983）が開発した Quality Marriage Index (QMI) 日本語版6項目を用いた。さらに、産後は、授乳方法と親子関係について、大日向（1988）による育児についての意義の評価、7項目を用いた。

**ライフイベント：**ここ3ヶ月におきた、①パートナー（または子ども）の傷病・死亡、②自分の病気・怪我、③自分の親の傷病・死亡、④自分の親の介護、⑤自分の転勤・転職・昇格・降格、⑥パートナーの転勤・転職・昇格・降格、⑦大切な人とのトラブル、⑧転居・単身赴任、⑨災害・家事、⑩経済的なトラブル、10項目について、有無を問い、あった場合には、4件法にて負担を回答してもらった。得点が高いほど、ネガティブなライフイベントに見舞われ、負担に感じていたことを示す。

**FAD 日本語版：**家族機能について、家族の健康度を評価する自記式質問紙 McMaster Family Assessment Divas (FAD) 日本語版の7つの下位領域、全60項目のうち、全体的機能12項目を用いた。「よくあてはまる」から「ほとんどあてはまらない」まで4件法であり、低い値ほど家族機能得点が高いことを示す。

**SF-8 healthy survey (日本語版)：**健康関連 QOL の包括的尺度である SF-8 アキュート版を用いて QOL の評価を行った。1週間の健康状態を「全体健康感」「身体機能」「日常生活機能（身体）」「体の痛み」「活力」「社会生活機能」「心の健康」「日常生活機能（精神）」の8領域について、各領域1項目で測定し、身体的・精神的サマリースコアとして0-100点でスコア化される。高いスコアほど健康関連 QOL が高いことを示す。

**生活リズム：**ここ1週間の①起床時刻、②1日の最初に人と接触する時刻、③日常生活活動（仕事・家事）の開始時刻、④夕食の時刻、⑤就寝時刻、5項目について、VASにて、規則正しいから不規則まで尋ねた。得点が高いほど、不規則であることを示す。

## 5) 解析方法

統計パッケージ PASW18にて基本統計量を算出した。家族機能得点・SF8について、妊娠期・産後1ヶ月・産後6ヶ月を追跡するため、反復測定による分散分析 repeated measure ANOVA を用いて分析した。FAD および SF8 各スコアを従属変数とし、主効果として3（時期）と2（性別）を2要因、交互作用を時期×性別とし、初産と経産を分けて

有意水準は5%とした。

家族機能に関連する要因を探索するため、FAD得点を従属変数とし階層的重回帰分析を実施した。年齢・暮らしむきを最初に投入して制御し、続いて順位相関係数0.3以上の変数および先行研究から重要とされる変数について、多重共線性を考慮して変数選択を行い一括投入した。

#### 4. 研究成果

出産準備教室に参加した夫婦に第1回の質問紙を配布し、返信を持って同意とした。209組から第1回目の返信があったが、産後2回のデータ収集において返信のなかったもの、転居先不明で返ってきたもの、第1回の質問紙に住所の記名のなかったものを除外し、78組を分析の対象とした。(有効回答率37%)

##### 1) 対象者の概要

最終的に分析の対象となった夫婦78組の年齢・初経別・暮らし向きを表1に示す。最終学歴は、40%以上が、男女とも、短大・大学卒業以上であった。就業状況は、男性の80%が被雇用者であり、11%が自営業であった。女性は、主婦であり就業をしていないものが57%、被雇用者(産休中)が37%であった。ここ3ヶ月のライフイベントでは、どの時期の男女も40%近くが、ネガティブなライフイベントはなかったと回答した。一方、生じたイベントで回答が多かったのは、自分・パートナーの転勤・転職、住宅環境の変化であった。産後の授乳形態は、1ヶ月では、完全母乳あるいはどちらかという母乳が7割近いが、6ヶ月後には、半数となった。

表1. 対象者の概要 (N=78)

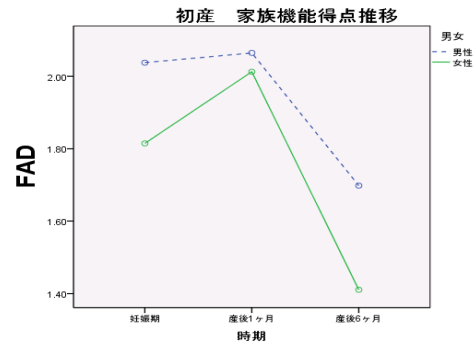
	n (%)	mean±SD
年齢		
女性		28.8±3.92
男性		30.1±4.38
初経別		
初産	48 (62%)	
経産	30 (38%)	
暮らし向き		
大変苦しい	3(3.8%)	
やや苦しい	7(9.0%)	
普通	38(48.7%)	
ややゆとりがある	24(30.8%)	
大変ゆとりがある	6(7.7%)	

※暮らし向きは男性からの回答による

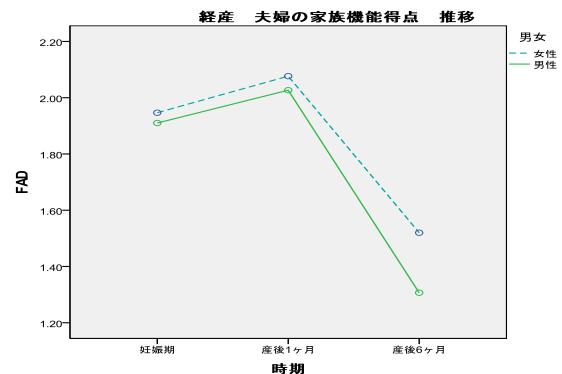
#### 2) 家族機能得点の推移

3時期のうち、初産・経産、男女いずれも、産後2ヶ月のFAD得点が最も高かった。これは、この時期が最も家族の全体的機能が低いことをあらわす。

初産の場合、時期と性別の主効果が有意であった。(p<0.001, p=0.007) 時期×性別の交互作用に有意差はみられなかった。(p=0.28)

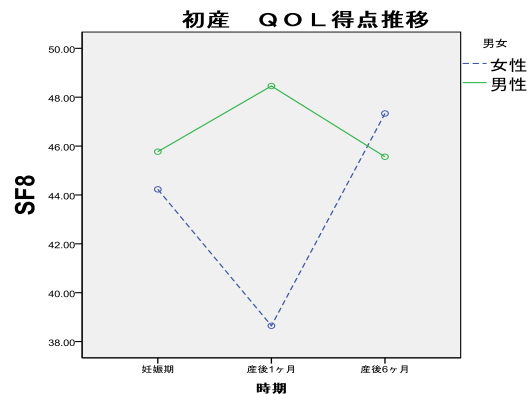


経産の場合、時期の主効果は有意であった。(p<0.001)性別、および、時期×性別の交互作用に有意差はなかった。(p=0.352, p=0.658)

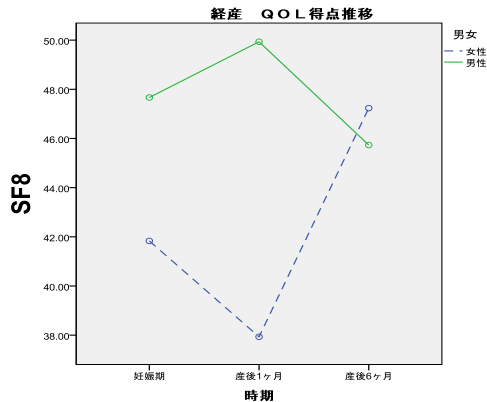


#### 3) SF8 身体的サマリースコア得点の推移

初産・経産別に3時期の男女の包括的健康関連QOL身体的サマリースコアの推移を示した。初産の場合、時期と性別、時期×性別の交互作用に有意差がみられた。(p=0.003, p<0.001, p<0.001)



経産の場合、性別と時期×性別の交互作用に有意差がみられた。(p<0.001, p<0.001) (p=0.078) 時期に有意差はみられなかった。



#### 4) 家族機能に関連する要因

表2は、産後6ヶ月女性の家族機能に関連する要因をしめす。ネガティブなライフイベントがここ3ヶ月なく、( $\beta = -.503$ ,  $p = .019$ ) 夫婦関係が良好と認知しているほど ( $\beta = -.503$ ,  $p = .019$ ) 家族機能得点が高かった。

表2 産後6ヶ月女性の家族機能に関連する要因

	$\beta$	p 値
暮らし向き	.151	.329
ライフイベント	-.503	.019**
授乳回数	.159	.248
生活リズム		
・ 起床時刻	.064	.758
・ 睡眠時刻	.002	.993
夫婦関係	.749	.000***
S F 8	.415	.044
調整済み R <sup>2</sup>	.426	

表3 産後6ヶ月男性の家族機能に関連する要因

	$\beta$	p 値
暮らし向き	.320	.042*
ライフイベント	.035	.829
生活リズム		
・ 起床時刻	.211	.296
・ 睡眠時刻	.200	.243
夫婦関係	.455	.005***
S F 8	.341	.003**
調整済み R <sup>2</sup>	.350	

表3は、産後6ヶ月男性の家族機能に関連する要因をしめす。暮らし向きにゆとりがあり、( $\beta = .320$ ,  $p = .042$ ) 夫婦関係が良好で ( $\beta = .455$ ,  $p = .005$ )、自らも健康と認知しているほど ( $\beta = .341$ ,  $p = .003$ ) 家族機能得点が高かった。

#### 【引用文献】

- 1) Mercer RT & Ferketich SL (1990). The predictor of family functioning eight months following birth. *Nursing research*, 39(2), 76-82.
- 2) 中村由美子 (2003) FDMII を用いた1歳6ヶ月までの乳幼児をもつ家族の家族機能の検討 8(2), 173-179.
- 3) Yamazaki A et al. (2005) Sleep-wake cycles, social rhythms, and sleeping arrangement during Japanese childbearing family transition, *JOGNN: Journal of obstetric gynecology and neonatal nursing*, 34(3), 342-348.

#### 5. 主な発表論文等

なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

山崎 あけみ (YAMAZAKI AKEMI)  
 東京大学・大学院医学系研究科・講師  
 研究者番号：90273507

##### (2) 研究分担者

柳吉 桂子 (YAGI KEIKO)  
 京都大学・大学院医学研究科・准教授  
 研究者番号：50254407  
 (H19～H20)

上別府 圭子 (KAMIBEPPU KIYOKO)  
 東京大学・大学院医学系研究科・准教授  
 研究者番号：70337856  
 (H20：連携研究者)